



松花堂昭乗「布袋弾琴図」江月宗玩賛 寛永年間(1624-1640)

◆◆ 館蔵品紹介 ◆◆

寛永の三筆の一人で、書の名手として謳われた松花堂昭乗が絵筆をとって、布袋が琴を弾じて楽しんでいるところを描いている。いつも市井に隠れて奇行をなすが、生まれながらの禅の達人である布袋は応化聖賢と崇められ、祖師達磨と同じように、禅画に描かれた。

松花堂は真言宗の阿闍梨、石清水八幡宮の社僧で禅僧ではないのに、なぜ布袋図なのだろうか。禅宗とともに水墨画が日本に伝えられ、始めは禅僧の余技に書かれていたのが、宋元名家の布袋図も室町幕府の御物に入り、次第に民間の絵師狩野正信らによっても描かれるようになった。

豊満の体軀、大きな堪忍袋を荷い、杖をつく姿が布袋さん。そして福をもたらす七福神の一人で、宝船にいっしょに乗る七福神の顔ぶれが揃うのは、室町末期のころといわれる。

とはいえ、室町時代の禅画にみる布袋の笑い顔に

は、顔輝の「寒山拾得図」同様、ちょっと凄みというか、妖気さえ感じさせられるのに、松花堂の布袋はまったく怖くない。大らかで屈託なく、子供のようきんに笑っている。純粹な笑いそのもの。この絵にみられる穏やかさ、厳しく突き詰めたように見せない軽さが、松花堂の特徴といえよう。

この布袋図の左上には、漢詩の賛が書かれる。賛を加えた水墨画を詩画軸といい、画僧と禅僧が盛んに手がけた。有名な如拙の「瓢鯨図」には瓢筆で鯨を捕らえんとする絵の上部に31人の賛が見られる。禅問答と同じく難しい賛ばかりで、専門家の解説を読んでも分かりづらい。それに比べれば、この江月宗玩が書いた賛は、絵と詩との関係が素直である。大徳寺156世住持の江月宗玩が深遠な禅の内容の詩を書けなかったわけではなく、これから述べる茶掛けの詩画軸として、一般の茶人にも理解のできる詩を添えたものなのだ。

解説者は詩が苦手ひょうねんずで、間違っひょうねんずた解釈であればご指摘をいただきたいが、詩の意味がおおよそわかって、

後から絵に付け合せた賛の呼吸が感じられると、絵がいっそう楽しく見られるはずである。

「耳中の消息^{しょうそく}、手の中^{うち}に知る^{こうべ}。弥勒頭^{りゃくとう}を指して聴くに、始めて奇なり。太雅、松風俱^{たいが}に二つながら落ち、絃^{せん}無くして高く響く一天涯。」

耳に入る琴^ねの音の変化は奏者の手が知るところ。布袋の正体という弥勒菩薩が半跏思惟すれば、素晴らしい調べが聴こえてくる。非常に気高く上品でも、松風が通うようでもない。絃が無いのにその高らかな琴の音は、空のはてまで響きわたる。

江月は、松風弾琴の詩の古典や、大徳寺からさほど遠くない太秦広隆寺の弥勒像を思い浮べながら、松花堂の可愛い布袋さんの左方に、七言詩を加えた。それも、丸っこい布袋に、一回り小さい袋、惺々翁(昭乗)の落款への左下がり、山道の稜線に呼应するように、絵上方に置く賛の仕来りを外さず、横に広がる絵の邪魔にならない絶妙な空間に、さらさらっと揮毫して、欠伸子^{かんしんし}拝賛(江月)(宗玩)と納めている。

詩に詩を合わせるのが唱和だから、そうは言えないが、絵と詩の呼吸がぴったりで心地よい限り。おそらく求めに応じた松花堂が、得意の布袋に、今日は琴をお弾きなされよと筆を走らせ、それでは宗玩和尚よろしくと、まくりの布袋図を託して帰る。持参して直ぐの着賛では、どんな詩を付して下さるか、どきどきしながら待つ楽しみがなくてはつまらん。まだかまだかと布袋の帰りを待ったのではなかったか。

というのも、松花堂と江月の合作詩画軸の数はざっと100点、その半分弱が布袋図であった。平成5年に大和文華館で「松花堂昭乗 一茶湯の心と筆墨」展が開かれ、図録の末に企画者 中部義隆氏が編まれた「松花堂作品掲載売立目録(抄)」からの数で、全てが真筆とは言えないまでもと注記の上、松花堂作品を本論で分析されている。

これほどお互いの芸術性、感性を信頼しあった書画共作者が他に存在するのか、筆者は知らない。同時代の本阿弥光悦と俵屋宗達のペアであっても、和歌巻5点、色紙や短冊を加えても50点には届かないだろう。しかも、宗達の絵は料紙装飾の下絵で、近代になってその素晴らしさが評価されて光悦と対等な関係になったが、宗達から届けられた金銀

泥下絵の料紙を出して、光悦が歌集を揮毫した後、書画競演の仕上がり具合を宗達に披露したとは思われない。

それに対して、松花堂と江月の二人はそろって堺出身、宗派こそ違っても仏に仕える身は同じ、そして何より、お互いの茶会に招きあう茶友であった。10歳年長の江月を敬う、松花堂の文雅の交わりは、飛び切り深かったに違いない。

松花堂の絵には自ら賛をしたための作品があり、詩は不得手であったはずもなかならうが、ほとんどは和歌を書いている。自賛であれば思ったところに好きなように足せばいいので、依頼した賛の出来が期待はずれとなる心配もない。それなのにどうして、江月ばかりか、大徳寺の沢庵宗彭や玉室宗珀、公家の烏丸光廣から大名茶人小堀遠州にまで、着賛を乞うたのか。

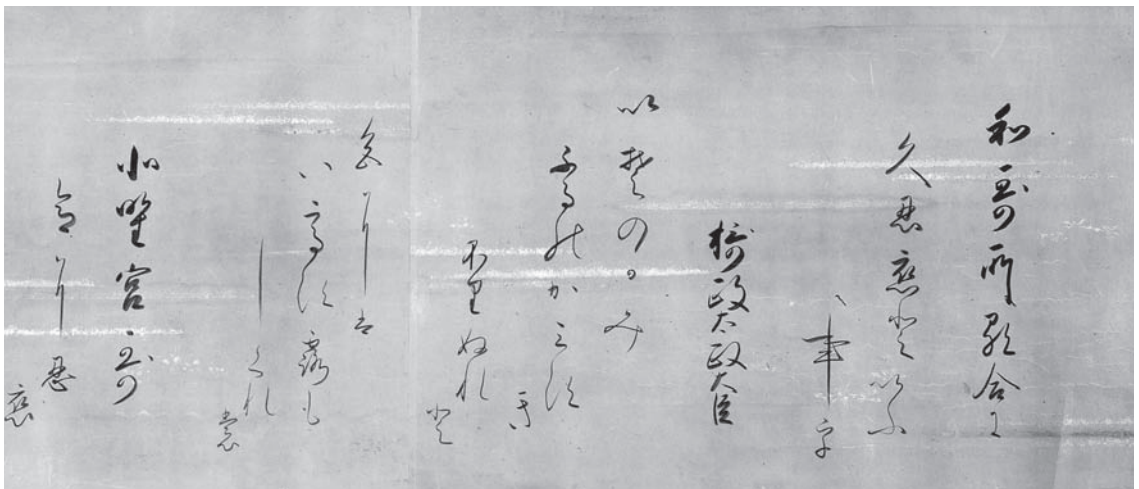
これは、別人が詠み継いで、思いがけない発想や変化を生む面白さがある連歌や、松花堂と江月が好んだ一期一会の茶にも通じていたからではないか。一服ならぬ一幅の出会いに、離れられない魅力を見いだしたのであろう。

江月は、今日の布袋さん、どんな恰好で訪ねてくるのか楽しみじゃ。松花堂の方は、陶淵明の無弦琴でと、さり気なく略したのに、すべてお見通しか。この前の居眠り布袋には、ほんまの弥勒の化身だとしても、眠った生まれ変わりなんて半文の値打ちと、やられましたよと。二人の大いなる談笑が見えてきそうだ。

さて、奈良の漆問屋松屋の茶会記である「松屋久重茶会記」寛永3年12月7日条に、大和郡山城主松平忠明の家臣 奥平金弥の茶会に招かれ、床の間の掛け軸が記録されている。「床ニ 馬二乗布袋 式部卿(昭乗俗名中沼式部)筆 江月ノ賛」とある。

松花堂43歳のこの年、江月の賛にかかる馬に乗る布袋図が、茶会の床を飾った。この席が松花堂絵画のデビューかどうかは分らないが、元和7年に沢庵の一行書が、同じ寛永3年に江月の一行書というように、大徳寺の存命住持が揮毫する短い禅語の墨蹟が、新しい茶の掛け物として登場し、多くの茶人たちに愛好されていったと知る。

松花堂の布袋図も同様に禅味があり、しかも渋くて重い禅の言葉に対して、軽妙で滑稽味まで備わっている。絵と詩の響きあうところも、実況のように新鮮に感じられたのであろう。



松花堂昭乗 新古今集和歌卷 (巻頭部分) 寛永14年(1637年)

遠山コレクションには、能書の松花堂が揮毫した和歌巻がある。新古今集の恋歌の中から11首を選んで、金銀砂子の霞引きと秋草を書いた料紙に、流麗な仮名で散らし書きしたもの。上代様という最も美しいかな書を生んだ平安後期の和様書道を、近世になって再興させたのが寛永の三筆で、中世の伝統的で型にはまった書から、桃山時代の世相を映すような自由奔放な書をかいた。松花堂の書は近衛信尹、本阿弥光悦の二人に比べれば、やや穏やかな個性ながら、見方を変えれば、最も忠実な平安の仮名美の継承者ともいえる。

巻末には「寛永丁丑六月廿日依人之所望染筆侍釈昭乗」(寛永14)とあって、自らの創作意欲に乗っての作ではなかったようだ。それもそのはずで、この年11月には弟子に瀧本坊を譲って、翌月に松花堂方丈を営み、風雅三昧に入るつもりでいただろう。

折角だから、名手の絵と書の墨線に、共通する特徴はないかと、しばらく眺めてみた。中国で書画同源の考えがあるように、用筆には大きな違いはないはずだ。書画ともに、柔らかく抑揚を極端にはつけない線が主である。この布袋では例外的に、腕を滑らかに回して引く細い琴の縁取り線が反転して、琴の胴を一筆で描き出すような勢いある面的な墨線も見られる。また、顔などの淡墨から杖の濃墨までの諧調が実に豊かで、墨のコントロールが巧い。和歌巻は鳥の子紙に書いているので、極細の線もしっかりと墨がのっている。運筆は共にゆっくり。布袋の胡坐をかいた右足と、袋左側の「し」の字線な

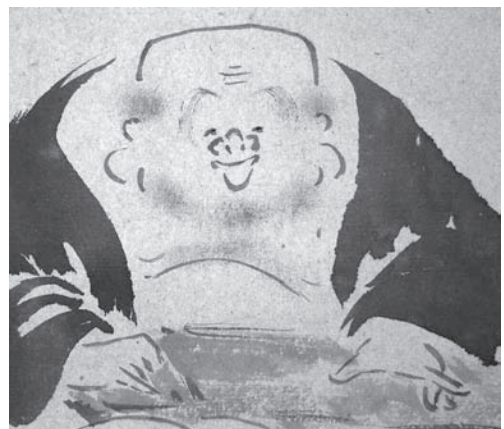
どは仮名とそっくりで、針のような穂先から入って、ゆっくりと膨らみ、すーと抜ける美しい線である。

布袋の袋の結び紐にみる上下する連続線は、ほとんど漢字の草書体か、そ(所)な(那)の仮名の流れを思わせる。

線は線でも、布袋の衣文線は、墨染めの衣のひだを彫り塗りといって白抜きに残した線で表している。また、薄い墨色の耳上に残る髪とあご鬚は筆の線ではない。筆毛の痕は見られず、拓本採りに使うタンポに少しの墨をつけ、やさしく置くように描いたのかもしれない。

小さな目の中には瞳の黒点を入れ、絛を押える左手、弾ずる右手も、わずかな線で動きの瞬間を捉える技量が見事である。初春の「ことほぎ」展でご覧いただきます。

(久保木 彰一)



小林桂子氏ご寄贈の染織コレクションについて 第1報

井上 則子

1. はじめに

すでにご存じの方も多いかと思われるが、遠山記念館の館蔵品の半数以上は世界の染織品で占められている。

収蔵の経緯としては、遠山元一の個人収集、財団法人設立後の購入のほか、染織研究者や愛好家、染織作家など個人の方からのご寄贈品を受け入れてきたものも数多くある。とくに数のまとまった寄贈品としては、1996～2001年に受贈した山辺知行・元当館館長(染織研究家)の日本、中国、インド、東南アジア、ヨーロッパなど世界各地の染織品約2,300件が筆頭に挙げられる。

そのおかげで所蔵染織品の数も8,000件を超え、内容的にも大変充実したものとなってきている。これらの染織品は年に1～2回行われる染織中心の企画展のほか、他の工芸品との組み合わせ展示などでご覧いただいている。

そのような館蔵染織資料に新たに加わったのが前号でもご報告した織物作家であり研究家の小林桂子氏のコレクションである。

この小林コレクションは昨年度に796点、今年度第2回のご寄贈で557点を戴き、その数1,353点となっている。これに加え100点を超す併その他の染織品に関し来年度にかけて受贈する予定で、これにより小林コレクションのほぼ全てが当館に移ることとなる。右の表に昨年と今年に受贈した染織品その他の内訳を示した。(内訳には氏の作品も含まれる。)

2. 小林桂子氏プロフィール

小林桂子氏についてまずここでご紹介したい。氏は大学では住居学を学び、1970年に卒業後に就職した商事会社で住宅設計やインテリアデザインの仕事に就いていた。

小林氏はこの仕事をする中でテキスタイルデザインに出会うが、この頃の想いを著書『糸から布へ』の中で述べている。「住居学では、垂直の柱に水平の梁をかけて木材を組合せ、積み上げてどのように家を建てるかである。その後には木材を組み合せた木

平成25・26年度受贈小林桂子氏コレクションの
地域別資料点数

地 域	種 類	点 数
日 本	染織品	328
	籠製品	28
	玩具	14
	金工品	1
中 国	染織品	126
	籠製品	2
	竹製品	1
韓 国	染織品	9
東南アジア	染織品	136
	籠製品	25
	竹製品	1
	玩具	2
南太平洋	染織品	12
中央アジア	染織品	16
中近東	染織品	87
	籠製品	3
南アジア	染織品	154
	籠製品	4
	玩具	4
	木工品	1
ヨーロッパ	染織品	178
	籠製品	1
アフリカ	染織品	65
	籠製品	14
	玩具	2
アメリカ(北・中・南)	染織品	99
	籠製品	16
	玩具	2
	木工品	1
不詳アジア及び地域不詳	籠製品	3
地域不詳	染織品	27

枠^{はた}の構造に触れ、住宅の構造と類似していること、次に布の構造も縦方向の糸と横方向の糸が交差していることを知った。木造建築は、機^{はた}そして布とも同じ構造であることに興味を抱いたのである。(下線は小林氏、ルビは井上)」

1976年にアメリカへ渡り、カルフォルニア美術工芸大学染織科にて染織史などを学び、1983年に多摩美術大学大学院デザイン科修士課程を修めた。

カルフォルニア美術工芸大学の隣町パークレーは当時アメリカでもっともテキスタイルアートが盛んであった。小林氏は染織品をモダンアートとして受け止める感覚をここで養ったようである。

多摩美術大学では当時教鞭をとっていた山辺知行氏のもとで学び、日本染織史や文様史について造詣を深めていった。山辺氏の自ら手を動かし糸を操り、試作や実験を通して染織を考える姿勢に共鳴したと語っている。

大学院卒業後は上野学園短期大学で住居学、染織工芸を、武蔵野美術大学等の美術大学で染織入門を教えながら織の研究を進め、学会への論文発表、展覧会カタログの解説執筆、染織専門誌の連載などの活動を展開する。特に世界の民族の織物や古代の織の工程を解明する研究は、織物作家としての小林氏に大いにインスピレーションを与えることとなったようである。

3. コレクションについて

したがってコレクションのテーマはずばり、染織技法。小林氏は興味を引かれた織物の数々を、地域や時代にこだわることなく収集し、その技法を解きほぐし先述の著書にまとめあげた。収集品のなかには木綿や羊毛糸、植物繊維といった織物素材ばかりでなく竹や木、ステンレスなどでできたもの、つまり籠^{かご}や笊^{しゆ}、網、麦わら細工などが含まれるのが面白い。収集した品の分類も時代、地域別ではなく、技法別にされているのも織物研究者ならではの考え方といえるであろう。

『糸から布へ』では「編む」、「もじる」、「組む」、「交差する」、「織る」という分類で様々な技法の制作方法について記してあり、氏のコレクションも掲載されている。この学芸員ノートでもその分類に沿っていくつか取り上げご紹介していくこととする。

ただし紙面の都合上、今号では昨年度寄贈された染織品について述べ、本年度受贈したものおよび来

年度受贈予定の染織品については号をあらためてご報告する予定である。なお写真図版はP.8～9にまとめた。

4. 技法別コレクション紹介

その1 「編む」

まずは「編む」技法の作品を数点ご紹介する。「編む」といえばすぐ思い浮かぶのは鉤針^{かぎ}や編み棒^{かぎ}を用いて製作されるものであろう。特徴としては前段のループ(輪)に次の段の糸輪をくぐらせるもので、インタールーピング(Interlooping)という技法名で括られる。写真1、2はいずれも小さな袋であるが、1はヨーロッパのいずれかの国で作られたもの。薄紫の糸を、金輪を芯にして鉤針でこま編みし、輪を繋いでいる。また2は20世紀初頭のシリアの袋で、小林氏によると刑務所に入っていた男性が編んだものであるという。緑、赤、青、黒色の糸で鳥や植物が編みこまれ、ファスナーのついた口部分は赤地幾何文様の帯で縁どられている。

次にリンク技法の作品をご紹介します。「リンク^{らりんぐ}-Linking-

」は糸や紐を螺旋状にかけ、前段の糸に連結させる技法を指す。公園などで良く目にする亀甲金網もこの技法である。写真3は京都の豆腐^{すく}掘いで1970年代に製作されたもの。日常使いの金網製品であるが、古くからの伝統技術と研ぎ澄まされた美意識を持った職人の手から生み出された確かなかたちが見て取れる。

編物の最後はルーピング-Looping-技法の作品で、中国の清時代末期から中華民国初めの竹ビーズの汗取り下着である。(写真4)ルーピングは針を使ってつくったループ(糸や紐の輪)に糸や紐の先をかけて引き抜き掛け輪していく技法。(この時前段のループに後段の糸を結びとめるのが魚網に多くみられるノット^{ノット}イング-Knotting-技法となる。)この汗取りは細い管状の竹ビーズを糸に通した糸で編まれている。中国の官僚が官服の下に着用したものではないかといわれている。

また写真5はペルー、チャンカイ文化(1100～1470年頃)の筒状の網袋である。ルーピングの变化形で、経糸^{たていと}と緯糸^{よこいと}の交差点を緯糸が巻き込んでひと結びして止めている。白地に黄土・赤の木綿糸で「く」の字形と直線の文様を表す。初見では底まで通った袋と思われたが、3段に区切られた袋となっている。埋葬するミイラにコカの葉などを封じ込めて持たせ

るためのものとも考えられるが、類品が見つからず
使用法は不明である。

その2 「もじり」

並行にした経糸を2本の緯糸をもじりながら止めていく緯もじり(蕤がその代表)、逆に経糸をもじって緯糸が止める経もじりなどがある。古代ペルーの紀元前2500年頃のワカ・プリエタ遺跡からはすでにコンドルやカニなどの文様を表出したもじり技法の裂が出土している。写真6はカナダ、バンクーバーに住む先住民ヌートカ族の小さな蓋付籠で1980年代のもの。捕鯨の様子が2色の緯糸で文様を作る緯もじり技法で表現されている。

その3 「交差する」

「交差する」…小林氏の解説ではInterlacingからの訳語である。小林氏は「斜め交差技法」と「たて・よこ交差技法」に分類するが、前者は組紐のように数本の糸を交差させて紐や帯を、あるいは麦わらや竹、ヤシの葉を紐皮状にしたものを組んで帽子、籠などを作る技法である。これが経・緯の糸を平行に揃え直交させるとたて・よこ交差技法となるが、やはり籠製品のほか、レース技法にも見られる。

斜め交差の作品として20世紀前半のスイスで作られた人毛組紐ネックレス(写真7)を掲げた。日本ではあまりなじみがないが、ヨーロッパでは大切な人や故人の毛髪をアクセサリや時計の紐にするため専門の職人に製作を依頼する風習があったという。毛髪は楕円の籠状に細やかに組まれ、弾力があり軽い。また写真8は日本の明治期の作と考えられる籠製たばこ入れである。同じ技法であるが側面は細い材で細かく組んだものを用いている。絞地を模した木綿の染布が口を覆い、通した紐を菩提樹の実で締める。その紐の先には竹片の根付が付けられている。

たて・よこ交差の作品として掲げたのは兵庫県豊岡市の飯行李(写真9)である。コリヤナギという水辺に生える柳の枝を用いて籠などをつくる豊岡柳細工は少なくとも1200年の歴史があり、正倉院に収められた柳篋はこの地で作られたものとされている。平成4年に伝統的工芸品に指定。小林氏の寄贈品には新旧2点の飯行李があり、写真9はそのうちの新しいもの。伝統工芸士の藤本ふじえ氏・丸岡政子氏姉妹による2004年の作品である。小林氏はたて・よこ交差技法で隅が丸い箱はめずらしいと注目し、

著書『糸から布へ』のなかで詳しい説明をされている。

その4 「カード織とプライ・スプリット」

たて・よこ交差やもじり組織をつくる他の手法で作られた作品2点を写真10、11に掲げた。

写真10はミャンマーのカード織の紐である。カード織は回転綜統板という穴のあいた四角いカードを用い、穴に経糸を通し、回転させて緯糸を入れることで文様入りの帯が織れる技法。この紐はサジギョウと呼ばれ、仏教寺院に信者が奉納する経典の包みを巻いて閉じるためのもので、信仰に関わる言葉が寄進者名とともに白と薄赤の両面織で表されている。

写真11はイラン東部のゲーチャン・クルド族がラクダに掛けるプライ・スプリット技法による飾り紐。

幾何文様とともに人物や動物を二層になる技法で表現している。色彩は白地に黒が主で、房飾りと房飾りに近い部分に黄色、ピンク、水色、黄緑などの色糸が使われている。プライ・スプリットは撚糸を開いたところに別の撚糸を割り入れていくことでもじり組織をつくる技法である。(イメージしやすい例として小林氏はその著書のなかで、干し柿を作る際にロープの撚りを緩めて柿のT字に残した軸枝を通して再び締める写真を載せている。)

その5 「刺す」

地布に色糸針で刺し入れ文様を表す刺繍布をいくつか見てゆくと、中国やタイなどの細やかな作品に目が行く。写真12は中国少数民族、苗族のおぶい紐で、紐の部分は欠失しているが、深い藍染め木綿地に刺繍でピンクの花文様を、様々な色彩の小布を畳み込んで積み重ねる「布畳パッチワーク」(中国で堆繡・ドイシュウーと呼ぶ)で放射状の文様を表している。

写真13、14はいずれも1970年代アフガニスタンのイスラムの儀礼用布。13は朱色や紫、ベージュや緑色の絹糸で繊細な幾何文様が両面刺繍でほどこされた、祈祷用の品を包む小風呂敷である。14はハザラ族がシーア派イスラムの聖地カルバラから持ち帰った「聖なる石(粘土板)」を包む布である。表された手は悪を追い払うという。紫、オレンジ、白色の光沢の美しい絹糸が文様部に使われている。

写真15はアフリカ、コンゴ民主共和国(旧ザイール)のクバ族の布である。アフリカやマダガスカル

に生えるラフィア椰子の若芽の繊維を糸にして織った布を茶色に染め、やはりラフィアから採取した糸による刺繍とドロワーク（経糸と緯糸を一部引き抜いたあとに残った織糸をかがって透かし文様を表す刺繍の一種）で線や円を組み合わせて洗練された抽象画のような文様を施している。

その6「染める」

著書のほうには掲載されていないが、昨年度ご寄贈いただいたコレクションには染物も含まれているのでいくつかご紹介する。

写真16はフランス、ミュールーズ製とされる19世紀半ばのカーテンと思われる^{そめぎれ}染裂である。ローラー式の銅版プリントで、白地に紫の濃淡のみの色彩を用い老人の男女を取り囲む人々を表している。このような1色摺りの染布は「トワール・デ・ジュイ (Toiles de Jouy ジュイの綿布)」と呼ばれ当時流行し、本裂のような牧歌的風景のほか、歴史画、神話的情景、寓話などが格調高く表現された。

写真17は20世紀後半に製作されたインドの寺院用の掛け布である。カラムカリと呼ばれる手描き染めが盛んなアンドラプラデッシュ州カラハステイのものと考えられる。インドの寺院用掛け布にはその地域で信仰されるヒンズー教の神像を描くことが多い。この布にはカラハステイで信仰を集めるシバ神が赤地に薄青色の色彩で表されている。

次に絞り染めから2点ご紹介する。写真18は1970年代のカメルーンのパミレ族の絞り染布。24枚の小布を接ぎ合せ1枚にし、文様の輪郭にそってラフィアの糸で縫い絞って防染し、藍で染めている。祭りや儀礼の際に腰布にしたり、王座の後ろに掛けたりして用いる。

写真19は蠟を用いて防染染めをするろうけつ染め腰布である。中国、貴州省、凱里市の苗族の女性が着用するもので、ミリ単位の細かい^{がいろ}襷^{ミヤオ}が特徴である。藍染の青・白地に赤地幾何文様の刺繍裂と小豆色の無地裂の小片が縫い付けられ彩りを添えている。

最後に日本の裂をひとつご紹介する。写真20は明治頃の手絡という女性用髪飾りで、島田髻などを結う際に用いる。本来布製であるが、幕末頃からは、紙に丁寧^{ちりめん}に鹿の子絞りや縮緬加工を施した模造品が貧しい人々や田舎の女性たちの間で使用されていたという。

写真は植物のような模様を茶地に白く染め抜いた

後、和紙を濡らして型押することで縮緬^{ちりめんじわ}を付けている。模造品とはいえ絹製品に勝るとも劣らぬやわらかな風合いが感じられる。

5. おわりに

本来なら遠くない時期に受贈記念の展覧会を企画すべきところではある。しかし製作地の地理的範囲が広く、また織物作家という、これまでの寄贈者とは異なった立場と視点で収集された資料が多いため、一般観覧者の視点との接点を探さなければ展示できないと判断し、とり急ぎこの学芸員ノートで概要をご紹介しようと考えた次第である。

またこれらの作品を染織の研究者や学生あるいは作家の皆様に広く活用して欲しいという小林氏の御意向を踏まえ、当分の間、特別観覧という形でお申込みいただいた方にご覧いただく予定である。

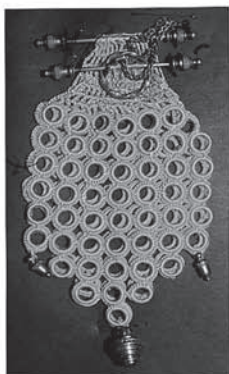
6. おわびと訂正

前号の寄贈品紹介で小林桂子氏の住所を「世田谷区」と記してしまいましたが、正しくは「大田区」であります。ここに訂正しお詫び申し上げます。

＜参考文献＞

- ・『糸から布へ 編む・もじる・組む・交差する・織る技法』小林桂子著 2013年 日貿出版社刊
- ・『世界大風呂敷展 布で包むもの』展図録 国立民族学博物館編 2002年 (財)千里文化財団刊
- ・『スイス/バーゼル民族学博物館蔵 インドの伝統染織』マリー・ルイーゼ・ナプホルツ・カルタシヨフ著 とみたのりこ・熊野弘太郎訳 1986年 紫紅社刊
- ・『藍と暮らす人々 トン族・ミヤオ族・タイ族 太陽と精霊の布—中国・東南アジア少数民族の染織』展図録 千葉市美術館制作 2004年 マンゴステイン刊
- ・『別冊 太陽 骨董を楽しむ32 アジア・アフリカの古布』2000年 平凡社刊
- ・『クバ王国のアップリケと草ビロード アフリカン デザイン』渡部公三・福田明男著 2000年 里文出版刊
- ・『海を渡った江戸の和紙 パークス・コレクション』展図録 紙の博物館編集・発行 1994年
- ・“Art of The Basket Traditional Basketry from Around the World” Bryan Sentence Thames & Hudson 2001

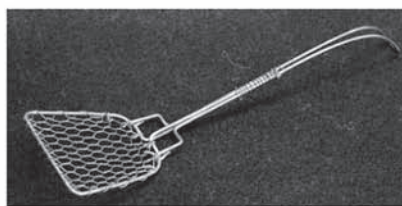
＊本文掲載の作品の写真・法量・主な材質＊



1. 6.6×13.0 絹・金属



2. 11.6×17.4 羊毛・木綿



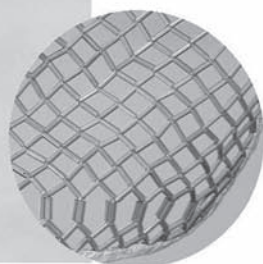
3. 長16.7
幅4.5
ステンレス



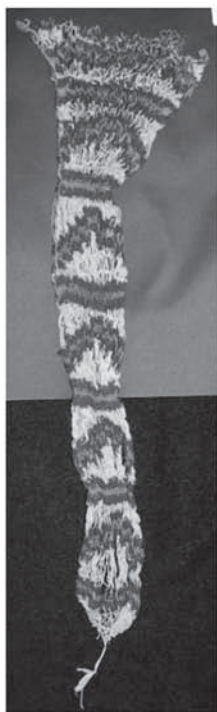
9.
12.0×20.8
高7.5 柳



4. 丈77.0
幅(袖～袖) 159.4
竹・木綿



5. 長約49.0 木綿

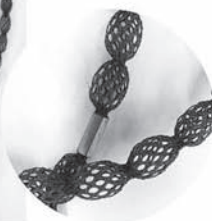


6. 直径4.8 高3.0 ペアグラス

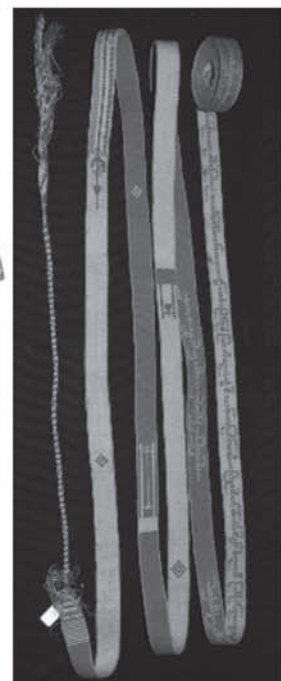


8. 7.2×11.4
竹・木綿・
ボダイジュの実

7. 長97.0 人毛



10. 長464.0 幅1.6 木綿



11. 長203.0 幅11.8 山羊毛



12. 107.5×70.0 木綿・絹・金糸



14.
25.6×33.4
木綿・絹



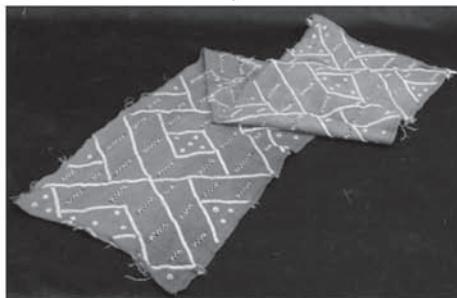
13.
21.0×21.0
木綿・絹



17. 125.0×194.0 木綿



15. 32.2×119.2 ラフィア



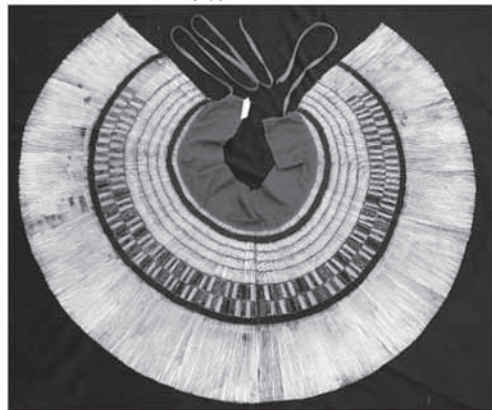
16. 51.0×131.0 木綿



18. 11.2×166.0 木綿



19. 93.0×52.0 木綿



20.
6.0×
30.0
紙



ことほぎ ―吉祥のかたち― 1月9日(金)～2月8日(日)



円山 応挙「黄初平図」安永6年

未年にちなんだ置物や、日本の松竹梅や鶴亀などの吉祥文の書画工芸品を取りそろえ、初春を寿ぐめでたい品々をご覧ください。

円山応挙の作「黄初平図」は、中国の仙人の初平が羊の放牧中に帰らなくなり、40年後に兄と再会して、石に変じた羊をもとに戻す話。羊の木彫の作家石川光明は、東京美術学校の教授となり、高村光雲や日本画の横山大観、橋本雅邦などとともに近代の美術界をリードした一人でした。

めでたい松花堂昭乗「布袋弹琴図」も、宝船の縁起絵とともにご覧下さい。



石川 光明「羊」
明治44年

雛の世界

2月14日(土)～3月15日(日)

江戸期に開花した人形文化は、日本独自の雛人形を母体として、多種多様な人形を生み出してきました。

本展では、雛人形を中心に江戸時代中期から昭和時代中期頃までの様々な種類の人形を展示し、日本の人形の歴史をたどっていきます。高さが60cm以上もある大型で豪華な享保雛をはじめ、丸顔で愛らしい次郎左衛門雛、江戸っ子に人気を博し、現代の雛人形のもととなった古今雛、高さが2～3cm程のミニチュア雛、また久保佐四郎や永徳斎、大木平蔵など、名工と呼ばれる作家たちの雛人形などを出品致します。他にも嵯峨人形、御所人形、衣裳人形、賀茂人形、からくり人形、抱き人形なども展示致します。また今回より、昨年度、一昨年度にご寄贈いただきました、石井コレクションの郷土人形をご紹介しますコーナーも設けました。

併せて会期中、遠山邸の大広間では、十畳間の座敷いっぱい飾られた雛壇飾りもご覧いただけます。これらは当館の創立者である遠山元一が、大正9年生まれの名女貞子の初節句の祝いとして揃えたものです。関東風の「段飾り」と京都御所の紫宸殿風の館に人形を飾る「御殿飾り」の二組で構成されています。日本の人形が持つ魅力をご堪能下さい。



立雛(江戸時代中期～後期)



遠山家雛壇飾り(大正時代)

「親子で楽しむワークショップ&ギャラリートーク 投扇興遊びと展示解説」

共催 川島町教育委員会「地域子ども教室」 2月14日(土) 午前10時～12時

せんすを投げて的にあてる、昔のゲーム「投扇興遊び」に挑戦してみませんか。またその後は、遠山邸に飾られた遠山家のおひな様や美術館で開催中の「雛の世界」展を見学します。

申し込み方法：電話もしくはメールで1月9日(金)より予約を受け付けます。

電話 049-297-0007 メール arai@e-kinenkan.com

参加対象：小学生(入場無料)と保護者です。

お子様だけの参加も可能です。参加費は不要です。



ご当地グルメとコラボレーション！

「古今雛 遠山邸2階での特別公開と郷土料理 かわじま呉汁を楽しむ会」

2月21日(土) 午前11時30分～



古今雛(江戸時代後期)

担当学芸員による「雛の世界」展及び普段非公開の2階を含めた遠山邸の解説の後、送迎バスにより地元の料理店に行き、郷土料理「かわじま呉汁」を召し上がっていただく企画です。

また、遠山邸の2階では「古今雛」(江戸時代後期 高さ60cm)を間近でご鑑賞いただく機会を設けました。ご希望の方は食事の後、再び記念館にお帰りいただき、自由見学やお抹茶・お菓子などをお楽しみいただくこともできます。

参加費：2,500円(入館料、飲食代込み)

申し込み方法：電話もしくはメールで予約受付中！

(先着30名様まで)

電話 049-297-0007

メール arai@e-kinenkan.com



川島町を代表するB級グルメ
「かわじま呉汁」

「雛祭りの日」ガイドツアー

2月25日(水)～2月28日(土)・3月3日(火) 午前11時30分・午後2時

期間中の午前午後の2回、担当学芸員が「雛の世界」展と「遠山邸」を解説します。

(所要時間は約1時間30分です)

投扇興を楽しむ会

2月15日(日)・3月14日(土) 午前11時・午後2時(1日2回開催)



「遠山記念館 雛祭りの茶会」

3月1日(日) 午前11時～ (第一回) 午後1時～ (第二回)
午後1時50分～ (第三回) 午後2時40分～ (第四回) 各回20名

当館では毎年雛祭りの時期になると、邸宅や美術館には雛人形をはじめ、様々な人形が飾られ、館内は賑やかで華やいだ雰囲気に包まれます。このたび雛祭りにちなみ「遠山記念館 雛祭りの茶会」を開催することになりました。普段は公開していない遠山邸の2階、数寄屋座敷でのお茶会は今回初めての試み。座敷から一望できる庭園の美しさも魅力の一つです。また2階の洋間もご覧いただけます。どなたでもお気軽にご参加下さい。お待ちしております。なお呈茶終了後には、担当学芸員が「遠山邸」と「雛の世界」展をご案内致します。



遠山邸中棟2階 座敷



金欄手桐竹文天目
花唐草蝶蒔絵中棗

主 催 公益財団法人 遠山記念館 本 席 遠山邸中棟2階 座敷
担 当 依田 徹(当館学芸員) 席 料 入館料とは別途、お一人様 1,000円
申し込み方法 電話もしくはメールで1月9日(金)より予約を受け付けます。
電話 049-297-0007 メール arai@e-kinenkan.com
定員に満たなかった場合は、当日のご参加も受け付けます。

夏のけはい ―海山の書画と単衣の着物―

5月16日(土)～7月5日(日)

梅雨の晴れ間に顔を見せた太陽の日差しの強さに、ふと夏の気配を感じます。梅雨から初夏へと移ろいゆく季節を、館藏品の中から初夏の海や山の情景を先取りする作品でお楽しみください。心地よくさわやかな風景の二曲屏風や夏の天草洋を詠んだ詩を揮毫した掛軸、美しい色彩と丹精を凝らした形の工芸品、そして涼やかな模様の帷子やかわいい子どもの着物など選りすぐったものをご覧いただきます。

【主な展示作品】

中川八郎 筆「海辺」(明治～大正時代)…①、納戸地近江八景模様帷子(江戸時代後期)…②、釣舟花生 銘 淀屋船…③、頼山陽 筆「天草洋詩」(江戸時代後期)…④、タッサール・シルク(野蚕)絣サリー(インド)(20世紀)他



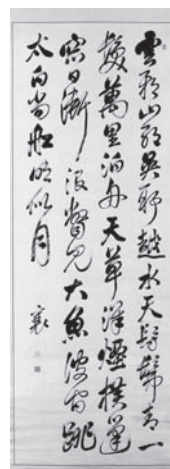
①



②



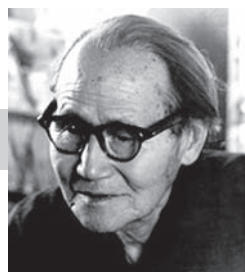
③



④

清水比庵 ひ あん —温かき歌人のまなざし—

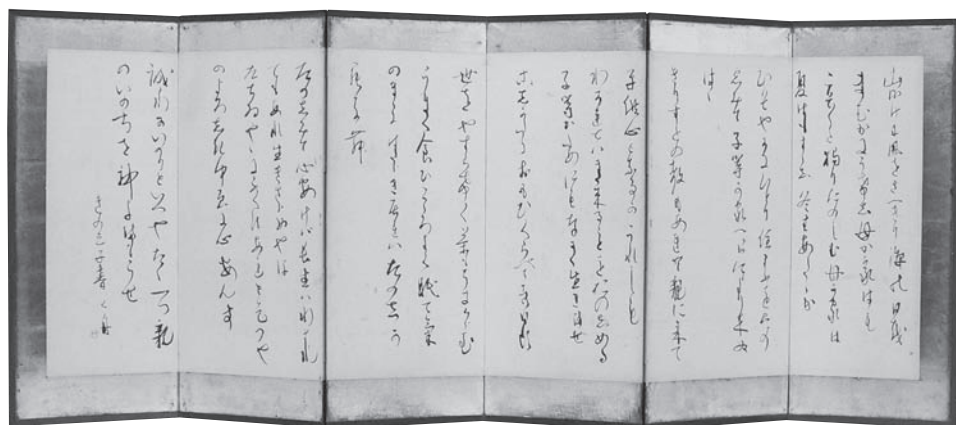
3月21日(土・祝)～5月10日(日)



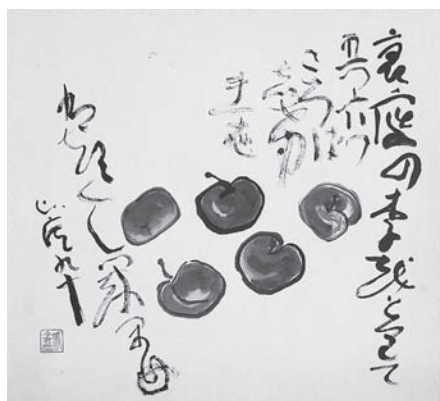
清水比庵(1883 - 1975)は、明治から昭和にかけて、豊かな感性で詩書画が一体となった作品を制作し続けた歌人です。比庵の米寿記念作品集『野水帖』やすいちょうを見た遠山元一がその作風に惹かれ、同じく証券界にいた比庵の弟、清水三溪さんけいを介して、気に入った作品三十数点を譲り受けたのは、当館開館の翌年のことでした。

今回の展示の中心となる歌屏風からは、比庵の母親に対する深い情愛が汲み取れます。母親孝行で知られていた晩年の元一は、共感するところが大きいにあっただいと思われまふ。元一が亡くなるまでの僅か1～2年の交友ですが、時間以上にお互いを理解し合えたのではないのでしょうか。司法官、銀行マン、日光町長など、様々な職に携わりながら、宮中歌会始めしうどの召人も勤めた異才の歌人、清水比庵。今年は、比庵が昭和10年に初めて「比庵」の雅号を用いてから80年、没後40年にあたります。ご令孫、清水固かたし氏のご協力を得て、50点ほどの優品によりその芸術世界をご紹介します。

自然の事象を温かく、ときに深遠に見つめるなかで生み出された、魅力溢れる作品の数々をお楽しみ下さい。



「歌屏風」1924年(42歳)



「すもも」1972年(90歳)



「富士」1970年(88歳)

遠山邸の端午の節句飾り 4月15日(水)～5月10日(日)



邸宅・大広間でご覧いただく遠山家の端午の節句飾りは、^{よろい}鎧冑を中心に、^{しょうき}鍾馗、応神天皇、加藤清正、金太郎など大正時代の五月人形の名品ぞろい。当主の遠山元一が、大正11年生まれの名長男一行の初節句の祝いとして揃えたものです。

旧家の伝統的な節句飾りは、最近ではめったに見ることができなくなりました。豪華な人形たちがお待ちしております。

レトロな空間で、ノスタルジックな音楽を ●手回し蓄音機によるSPレコード鑑賞会 Part 16 5月3日(日) 午後1時30分～2時30分

場所：本館大広間 先着50名様 入館料のみ

和風建築の技術の粋を集めて昭和初期に建てられた、遠山邸の大広間で、今ではほとんど忘れ去られてしまったSPレコードの鑑賞会パート16を行います。SPレコードは、エジソンが蝋管式のレコードを発明してから、大量生産に向く円盤型になって、音楽を記録する唯一のメディアとして一世を風靡しましたが、割れやすく、記録できる音域も時間も限られ、やがてLPレコードの出現によって姿を消しました。しかしながら、当時の名演奏家・名指揮者の演奏は、SPレコードでしか聴くことはできません。貴重な記録の中から、クラシック曲からはテノールのエンリコ・カルーソーなど伝説的な歌手の歌声や童謡・唱歌などを聴く予定です。電気を一切使わず再生されるノスタルジックな音をお楽しみください。



なお、ご自宅に、SPレコードをお持ちの方は、当日お持ち頂ければ、飛び入り再生も受け付けます。

●お座敷美術講座 御所解模様を味わう — 武家女性の小袖の文芸意匠 — 6月13日(土) 午後1時30分～

江戸時代後期の武家女性の小袖には、御所解模様という風景模様の中に器物を配し文芸的内容を加味した意匠が好まれました。今回ご覧いただく帷子の模様には、どんな物語が隠れているのでしょうか。凛として上品な武家女性の小袖模様をじっくりご覧ください。

参加費 : 300円

申し込み方法 : 電話049-297-0007にてご予約ください。

時間 : 1時間程度を予定しています。



暮らしと建築の美—遠山邸研究会—の報告とご案内

平成26年度は、遠山邸研究会・セミナー講演会を3回開催いたしました。各回とも、お陰様で参加者も多数お出でくださり、盛況に終えることができました。素晴らしいお話をしてくださった先生方に、あらためてお礼を申し上げたいと思います。

第7回 講演会 5月10日

講師 数寄屋大工棟梁 中村 義明氏

「木造建築物の現代的意義」

日本を代表する数寄屋大工 中村外二工務店の2代目中村義明氏に、なぜ木で家を作るのかという木造建築の意義、数寄屋建築の素晴らしさについて講演をしていただきました。



第8回 講演会 6月7日

講師 左官 久住 章氏 「遠山邸の塗り壁」

久住章氏はカリスマ左官と呼ばれる名人で、遠山邸の左官仕事についても早くから関心をいただきました。邸宅内を回ってそれぞれの壁の特徴と見どころをうかがいました。



第9回 対談講演会 9月20日

講師 東京木材問屋協同組合理事長 吉条 良明氏(左席)
建築評論家 馬場 璋造氏

「日本の伝統的普請」

日本の住宅建築の伝統的な建て方と木材について、対談形式で話をさせていただきました。人にやさしい木造建築と、昨今の本物志向にふれ、遠山邸は格好の手本になると評価をくださいました。



【これからの開催予定】

第10回 講演会 平成27年5月23日(土) 午後1時30分

講師 庭師 小川 治兵衛氏 「植治の庭」

京都で代々庭作りを携わる植治11代目小川治兵衛氏をお招きして、近代の京都東山の邸宅群の庭園と、作庭のお仕事についてお話をさせていただきます。

第11回の講演会は、平成27年9月の開催で計画をしております。講師に、茅葺き建築研究の第一人者 日塔和彦氏をお招きし、ヨーロッパの茅葺きを含め、茅葺きの特色をお話いただく予定です。日程は次号のたよりでお知らせします。

【申し込み方法】 ◆定員80名(先着順)

◆講座料300円、別に入館料700円が必要です

◆電話 遠山記念館(049-297-0007)か、メール(tkkk@e-kinenkan.com)宛にご予約をお願いします。

◆講演終了後(3時予定)に、遠山邸を案内いたします

●遠山邸の2階の特別公開



遠山邸の2階の部屋は、昭和11年竣工当時の姿をそのままに、あたかも主である遠山元一の帰りを待っているような静かな佇まいを見せています。

普段は非公開ですが、下記の日程で特別に公開いたします。洋式の応接室と寝室の2部屋には、1階の伝統的な和の座敷とはことなる独特の雰囲気があります。また、庭全体を見渡せる眺めのよい座敷も1部屋あります。是非、お楽しみになってください。

4月25日(土)、5月30日(土)、6月20日(日)、午前11時より午後3時まで



●遠山邸の解説案内

遠山邸が建てられた経緯や規模、連結する3棟の特色と座敷それぞれの意匠の違い、見所などを、1階を順に巡りながら解説いたします。毎週日曜日午後1時より

また、2005年からお願いしております解説ボランティアの秋山裕子さんに加え、2014年から梶野晴夫さんによるご案内もあります。ご案内日は基本として毎週火曜日と金曜日及び月3回の土曜日を予定しています。昭和初期にタイムスリップしたかのような空間で、銘木や職人たちの技をお楽しみください。

利用案内

入館料 大人 700円 学生 500円

中学生以下は無料

(団体20名以上は2割引となります)

交通 ●東武東上線・J R埼京線▶川越駅

●西武新宿線▶本川越駅

●J R高崎線▶桶川駅

川越駅～桶川駅間の東武バスで牛ヶ谷戸下車、徒歩15分

●開館 午前10:00～午後4:30 (入館は4:00まで)

●休館 月曜日 (祝日の場合は開館、翌火曜日)

年末年始、2月10日、3月17日、4月14日、5月12日

●美術館のみ展示替え休館

2月11日～13日、3月18日～21日、

5月13日～15日、7月7日～31日

●詳しい展覧会情報は下記でご覧いただけます。

URL <http://www.e-kinenkan.com>



遠山記念館だより 第48号

2014年12月 発行

編集発行 公益財団法人遠山記念館
編集担当 水上嘉代子

〒350-0128 埼玉県比企郡川島町白井沼675

TEL 049-297-0007

FAX 049-297-6951